

本論文は加筆・修正を加え、2017 年 1 月 30 日に株式会社晃洋書房より『花伝う花一世阿弥伝書 of 思想一』として刊行した。

室町時代に能を大成したことで知られる世阿弥（1363?—1443?）が、伝書を通じていったい何を伝えようとしたのかという点に焦点を当て、その思想の形成及び内実を伝書より捉えることを目指した研究である。世阿弥は、観阿弥の芸を受け継ぎつつ伝書をしたため、それを通じて後継へと芸を伝えようとしていた。この最も原初の「伝え」のとき、世阿弥の内側ではいったい何が起きていたのか。また、そこで紡がれた世阿弥伝書 of 思想とはいかなるものだったのか。そして、この「伝え」は、どのような仕方で成されていったのか。本論文の主題は、これら諸点の解明にある。

序論では先行研究の整理を行い、本論文が取り組む問題を鮮明化した。従来、世阿弥研究は能楽研究者と思想研究者とによって担われてきた。戦後の能楽研究史を振り返ると、表章の一連の研究が提出されて以降、実証的成果が次々に上げられる一方、世阿弥 of 思想それ自体への言及は、戦前ほど活発ではなくなった印象がある。世阿弥伝書 of 文献学的・実証的読解が、次々に着実な成果を挙げていくなかで、抽象論に陥りがちな思想研究は結果的に後景に退いてしまった。そうしたなかでも、相良亨や西平直らによる思想研究をはじめ、注目すべき独自の成果は生み出されているものの、実証的な能楽研究 of 成果との統一的な像を結ぶまでには至っていない。この点を省みると、近年 of 能楽研究 of 成果を十分に踏まえ、世阿弥 of 生きた時代に即して彼の思想形成を解き明かしながら、世阿弥伝書 of 根本問題を正面から問うような総合的な世阿弥 of 思想研究はいまだ現れていないと言える。能楽研究者が時代性を重視する実証的研究にその基礎を持ち、抽象的な議論をなるべく斥ける傾向があるのに対し、思想研究者は時代を超えた根源的なものを問おうとするあまり、場合によっては文献学 of 成果を飛び越えた形で議論を進める傾向があった。本論文は、「思想」を接点としてこれらの欠点を補うことで両者の研究 of 架橋を試み、改めて統一的な世阿弥像を結ぶことを目指した。世阿弥は、足利義持が実権を掌握した時期に大きな葛藤を抱え、思索を深めていったと考えられる。そしてこの歴史的局面からの思索こそが、世阿弥伝書 of 思想の基底を創りあげていると言える。したがって行論 of 道行きとしてはまず、歴史的局面において世阿弥 of 抱えていた葛藤を捉えることから出発し、徐々に彼の語りそのものの深部へと歩を進め、やがて伝書に書かれた思想 of 核心部へと到達するという経路を採った。

第一部では、世阿弥 of 能楽論が大きく転換した足利義持政権期を「ことの起こり」と位置付け、思想が形成された背景を追究した。第一章では、「初心不可忘」の教えに注目し、世阿弥 of 能楽論で観阿弥が理想化される過程を分析した。この教え of 核心が、後年の伝書

『九位』の習道体系に結実していたことを示し、教えの背後に観阿弥の芸を分析する世阿弥のまなざしがあることを指摘した。第二章では、第一章と対照的に、観阿弥を乗り越えようとした世阿弥の姿を分析した。義持政権への移行に伴い、世阿弥の目指す芸の情趣が変容していった。その過程について、伝書の「感」の内実の変化を具体的に分析して描き出し、『音曲口伝』第六条に見える『毛詩』大序が、観阿弥の芸を乗り越える理論的梃子として機能していることを明らかにした。第三章では、『風姿花伝』第三篇第九問答末尾にある慧能の偈の読解から、世阿弥の「心」をめぐる思索の深まりを捉えた。偈中にみえる「花情」の読みは、従来、禅の文脈から「花の情（こころ）」〔花の本質の意〕と読まれてきた。しかし、ここを伝書の世阿弥の言葉に従い「花は情（こころ）」〔花とは心である、の意〕と読む新解釈を提示し、世阿弥が「花」を「心」との関わりから捉えていることを指摘した上で、これが後年に至るまで世阿弥の内に巣食う課題となっていくことを指摘した。第四章では、『音曲口伝』第六条の「正しき感」をとりあげ、従来、思想面からの積極的言及がなかった世阿弥の『毛詩』受容を検討した。その際、清家系『毛詩』解釈、中世古今注『三流抄』との思想的重なりと隔たりに注目した。世阿弥は、当時共有されていた「誠」「正直」「心直ナル」などの中世的教養から「正しき」の概念を導き出しつつも、それを連歌論の用語「無文」と結びつけることで、飾り気のない音曲を高く評価する文脈へと巧みにつなげて読み替えていた。こうした世阿弥の語りの分析から、同時代の教養の重なりが具体的にみえてくるとともに、世阿弥が独自の語りを持ちながら、これらを統合していることが明らかになった。

これを受け、第二部では世阿弥独自の語りに注目し、「問われたこととしての思想」を追究した。特に、世阿弥が無上の上手（最高の演者）の芸とした「妙花風」が、「言語道断、心行所滅」とされていることを軸に、伝書の思想の基底に迫った。第一章では、能の「芸術」性を取り上げ、第二部全体の問題をゆるやかに示した。世阿弥によれば、能は「出で来」るものであり、すでにそこにあるものではない。能をこのように捉えることで、その「芸術」性の根源を、幽玄などの美的価値とは区別される、「妙」という美的経験に見出す考えを示した。第二章では、世阿弥が禅語で語ろうとしたことを、「妙花風」の淵源にさかのぼって明らかにした。世阿弥は、無上の上手の芸が、「成入（なりいる）」という在り方をとることを、禅語で捉えようとしていた。そしてこの在り方への注目は、世阿弥が禅と濃厚な接点をもつ以前に、すでに萌芽的にみられ、これこそが伝書の思想の基底であることを明らかにした。第三章では、無上の上手の芸の内実を解き明かし、その芸を後継へ「伝え」ることの問題を扱った。まず、無上の上手がひきおこす「無心の感」を分析し、「成入」芸が、究極的には「生きたる能」になることである点を明らかにした。その上で、「妙花風」は、自覚的に到達しえぬからこそ稽古の余地を開き、それゆえに、後継は稽古を通じてしかそれになりえない、という構造をもつことを指摘した。第四章では、謡曲《忠度》を素材に、「無心の感」を催す見手（観客）の面を明らかにした。見手の「無心の感」の経験とは、曲中で繰り返される「行き暮れて」の歌の真意を、その歌の内側から知ること、「須

磨」の「花」を見る度に、他ならぬ忠度の「名」を持つ「歌」として、それをおのずから思い起こす、という在り方が見手に刻まれる経験なのである。このような仕方、無上の上手の芸は、見手の「心」へと「伝え」られるのであった。

結論では、成果と課題という形で本論文全体をまとめると共に、今後の展望について言及した。成果としては、大局的な観点から述べれば、世阿弥の思想研究において、能楽・国文学を基礎とした研究視座と、哲学・倫理学を基礎とした研究視座との両者を同時に備え、且つ有機的に結び付けようと試みた従来見られない研究であった点が指摘できる。続いて、個別具体的な観点からは、以下の四点が本論文の成果としてあげられる。第一に、世阿弥の思想形成の原動力という視点から、内なる師観阿弥をめぐる葛藤に焦点を当てた点。第二に、『毛詩』大序・中世「古今注」・清家系『毛詩』解釈といった中世的教養の思想的内実から、典拠研究に留まらないレベルで世阿弥の思想との接点について具体的に検証した点。第三に、世阿弥が禅語を恣意的に用いているとの指摘を積極的に受け止め、世阿弥が禅語で語ろうとしていたことの内実を思想として捉えた点。第四に、世阿弥伝書の内容と世阿弥の謡曲作品とを本格的に接続させ、思想研究の面から検討を加えた点。これらは、本論文独自の成果と言える。

他方、十分な解決をみない課題も残った。第一に、世阿弥の思想研究という視点からいえば、『忠度』以外の謡曲作品と世阿弥伝書の思想との関係についても、深く追究する必要があった点。第二に、日本中世思想研究という視点からいえば、世阿弥伝書にみえる中世的教養のなかでも、『易』、陰陽論、中世「日本紀」に関わる問題までは扱うことができなかった点。第三に、より広く日本思想の研究全体という視点からいえば、語り得ぬ「知」を受け継ぐ事態を《をする》から《になる》へという思想で捉えるという視角の射程を見極めるという点。第四に、中世日本思想史研究の方法論という視点からいえば、思想的混沌の際立つ中世という時代を思想史的に分析するための手法の有効性をより明確に示す点。これらの諸点は、今後の課題として残された。